

ちがいのの狸

松田川の支流、篠川のずうっと上流に「ちがいの」という所があります。淵の水が瀬を作って流れていますが、飛石づたいに昔から渡り場でした。岸は岩場で、その付近には古狸の一族が住みつき、人間をたぶらかすといわれ、夜になるとまず通る人はいないといってもよい所でした。

平太じいは、親類の家で法事があってついつい一杯やりすぎて、話もあれこれはずむまま夜中過ぎまでがんばってしまいました。

人々が止めるのも聞かずに
「なあに狸の1匹や2, 3匹」
と笑って親類の家を後にしました。

提灯の灯をたよりに寂しい「ちがいの」の渡りにさしかかりました。

聞こえるのは瀬音だけ。
「狸のやつも、俺様の気合に恐れてよう出てこんじゃいか」
と独り言をいいながら渡り始めました。



後で平太じいさんと話したところ、少し道が遠すぎるとは思ったのですが、まさかそんなことになっちょるとは夢にも思わなかったそうです。

それというのも平太じいさん、まともに渡っていると思ったのだが、実の所はその渡り場を中心に川の中を明け方まで、ぼじゃぼじゃとまわっていたらしい。

疲れたので一休みと思って、川原に腰をおろした頃、夜が白み始めて来ました。

気がついたらぼしょ濡れで渡し場の端に座っちょる。こりゃあやられた。まさかと思うたが、やっぱり一杯くわされたと腹が立つやら誰ぞが来たら笑止なこっちょ。はよう、いなんといかん。立ち上がった所へ人の声。

当時のこと電話ちゅう様なものはどこにでもあるわけではない。

家の人達が帰って来ないので、迎えがてら捜しがてらに早朝出かけて来たのと、平太じいがこりゃしもうた。と気がついたのはほとんど同じ頃。

ともあれ、元気な平太じいも見事一本とられたという話です。

そんげなことがどうして起るのでしょうかねえ。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。